**総合人間学会KW執筆要領および規定**

**タイトル（MS明朝12ポイント太字、中央揃え）**

**英文タイトル（Century 12ポイント太字、すべて小文字、”中央揃え”）**

**総合 太郎（分野）（MS明朝10.5p、太字、右詰）**

**SOGO, Taro (Fields)（Century 10.5p、太字、右詰）**

**Ⅰ．頁設定**

用紙：A4横書き

原稿：Microsoft Word

文字数と行数：40文字✕30行

余白：上下30ｍｍ、左右25ｍｍ

**Ⅱ．記述上の留意点**

1. イントロ、本論、総合人間学KWとしての意義、発展的論点、批判的論点、まとめ、等に留意して、**3000字前後**で記述する。さらに、文末に参考文献（**10編以内）**を付す。
2. 専門を異にする複数者の共同執筆で対話的記述をする場合は各人 3000 字の記述が可能。
3. 規定が困難な大項目に関しては「前文」を提示し、「本文」は複数の小項目で構成し、記述内容は前文を踏まえた統一感を持たせる。

（学会HP掲載「総合人間学KW集・記述モデル」参照）

（KW2021.pdf (synthetic-anthropology.org)

**Ⅲ．フォント・文字スタイル・レイアウト**

**「キーワード」**（和字：MS明朝12p、太字・/英字：Century12p, bold）、中央揃え

（一行空けて）

**氏名と専門**（和字：MS明朝10.5p、太字 / 英字：Century10.5p, bold）、右詰め

（2行空けて）

**本文構成**

**小見出しを付ける場合：**MS明朝10.5p、太字

**タイトル**

（1行空けて）

**（１）サブタイトル**

（1行空けて）

**行頭および段落開始**：インデント一文字下げて本文開始　（Word 使用）

（和字：MS明朝10.5p / 英字：Century10.5p）

**句読点：**「、」「。」を使用

**特殊文字・強調語句・英語以外の外国語：**黄色で印をつける

イタリック、〇囲み数字、ふりがな、傍点、ギリシャ文字、ドイツ語、フランス語の文字、中国語の簡体字、特殊カッコなど（➀）、〔底層〕、　主体⇆客体**、**学際知、

池内(2)によれば、 さ、など。

**強調:**傍点・下線・太字ではなく、圏点を用いる。（例：学際知）

**アルファベット、数字、スペース：**半角のみを使用

(本文内のスペースには「全角空き」を使わない。例えば、段落の末に全角空きの連打、改行の代わり、氏名の名字と名前の間など)

**略語表記：**Aplastic anemia（AA）、AA : aplastic anemia

**Ⅳ．図・表**

各1枚以内

**図はjpgまたはpngで作成し、**本文挿入とは別途に原図を1枚提出する。

**Ⅴ．注、参考文献**

注はwordの脚注機能を使う。（だだし、編集後は後注になります）

（1）-――――――――――――――――――。

（2）-――――――――――――――――――。

参考文献は10編以内を一行空けて本文末につける。

和字：MS明朝、英字：Century、10.5p

書籍、雑誌の区別はせず、和文は執筆者のアイウエオ順に記し、その後、外国文は

執筆者のFamily nameのアルファベット順に記す。

記述例

穴見 愼一（2020）「総合知と自分（私） ― 当事者性の視座から「知のあり方」を問う」『総合人間学』14：88-110、本の泉社 (全角ハイフンの前後に半角スぺース)

斎藤 幸平(2020)『人新世の資本論』、集英社

長野 敬（2006）「生物学から見た人間」『総合人間学の試み ― 新しい人間学に向けて』、小林直樹編、学文社、60-71

ハリス,ユージン (2016)『ゲノム革命』、水谷淳訳、早川書房

福田鈴子・砂子岳彦(2020)「V.E.フランクルの実存を構成する自己と他者 ― 現象学の視点から解く人間構造と共生」『総合人間学研究』14:41-54

古沢 広祐（2020）「コロナ危機が問う自然・人間・文明」『総合人間学研究』14:83-90

三浦 永光（2015）「E.F.シューマッハーの現代経済学批判と〈超経済学〉の構想」『総合人間学（オンラインジャーナル版）』9:117-127

文部科学省 2001年1月25日 『21世紀教育新生プラン』  
   <http://www.mext.go.jp/a>menu/shougai/21plan/index.htm  (2001年9月14日閲覧）

O‘Neil, D.W., Fanning A.L., Lamb, W., Steinger J. (2018) “A good life for all within planetary boundaries” *Nature Sustainability* 1: 88-95

Levins, R. and Lewontin, R. (1985) “The dialectical biologist” Harvard Univ. Press, Massachusetts.

Vallee, B.L. and Bazzone, T.J. (1983) “Isozymes of human liver alcohol dehydrogenase” In: Isozymes, The Current Topics in Biological and Medical Research (Scadalios, J.G., Rattazzi, M.C. and Whitt, G.S. eds), Liss, New York, vol 8, 219-244.

**（例）**

**〈自己家畜化〉論**

**self-domestication theory**

**穴見愼一（環境思想）**

**上柿崇英（環境哲学／現代人間学）**

**長谷場健（社会医学/人間生物学）**

**ANAMI, Shinichi (Environmental Philosophy)**

**UEGAKI, Takahide (Environmental Philosophy / Contemporary Human Studies)**

**HASEBA, Takeshi (Social Medicine / Human Biology)**

(インデント一文字下げ)

１９５３年にJD.ワトソンとF.クリックによってＤＮＡの分子構造が解明され、DNAで生命を語る生命科学がスタートした。その到達点の一つとして２００３年にヒトゲノムの全DNA塩基配列が決定され、その長さは約３０億塩基対(ｂｐ)であることがわかった。------------------------------

**ジャンクＤＮＡの変異と生物複雑性の進化**

**ジャンクＤＮＡとは**

(インデント一文字下げ)

この膨大なジャンクＤＮＡは、後の研究でガラクタではなく約８０％が遺伝子ＤＮＡの発現を様々に制御する非コード（non-coding：nc）ＲＮＡに転写されることがわかった。ジャンクＤＮＡの４０％近くを占めるレトロトランスポゾンと呼ばれる外来ウイルス様ＤＮＡは、哺乳類で急増している。---------------------------------

**（文末）**

遺伝子は例えば「「鼻を作れ」ではなく、「嗅受容器を作れ」と指示を行っている・・・言い換えれば、表現型の観点からではなく、生化学の観点から指示を行っている」-------------------------。

**参考文献**

穴見愼一（2020a）「総合知と「自分（私）」 ― 当事者性の視座から「知のあり方」を問う」『総合人間学』14:88-110、本の泉社

**注**

（1）実際には様々なレベルの実験動物が使われている。------------------------

（2）動かない植物でも根の周りに細菌を侍らせて自らを防衛することがあるという。------